春屋妙葩再論

蔭木英雄

『貞観政要』に有名な草創と守文の難易問答があるが、中世禅林の最大門派たる嵯峨派を創めたのは言う迄もなく夢窓疎石であり[1]、それを守り確立したのは春屋妙葩であった。彼は『臨川家訓』『西芳遺訓』に遺された夢窓国師の教えを守り、時の管領勢力に抗してまで嵯峨派を中心とする禅林の結束を図り、北山時代の臨済禅の隆盛を齎したのである。筆者は先に『五山詩史の研究』第二章で春屋妙葩の文学について略述し、荻須純道師も『禅宗史の散策』で普明国師の事跡を述べられているが、ここに再びこの守成の禅僧を、文学を中心として追ってみたいのである。

春屋妙葩は「宝幢開山智覚普明国師行業実録』（以下行業実録と略記）によると、応長元年（一三一一）十二月廿二日、甲州平氏の家に生まれた[2]。母は源氏で夢窓国師の異母妹と考えられる[3]。

三歳の時、母に抱かれて浄居寺の夢窓疎石（時に三十八歳）に謁するが、国師に親侍する事は少なく、七歳の時、古渓大包庵の国師の下で、日課として法華経一軸を学んだ[4]。後世、自ら「不軽子」と自称したのは、この経典の常不軽菩薩品に拠ったのであり[5]、自他一如の精神、人間礼拝に徹するこの品の心を自己の心としたのであろう。

親しく夢窓疎石に参侍出来ぬ妙葩は、十二歳の時には満翁道明に[6]、十六歳の時には元翁本元に随って学問修行に励み、〃宗教の語脈を研究し、多く其の言論の風旨を獲〃（行業実録。傍点は以下もすべて筆者）たのである。〃語脈〃　〃言

論〃の語に留意すべきである。

鎌倉幕府倒壊のあと、夢窓国師は西上して南禅寺に再住するが、妙葩は関東に留まり、浄智寺の竺僊梵仙[7]の下で書状侍者を勤める。『天柱集』を読むと、竺僊和尚と風雅の交を結んだのは円覚寺白雲庵の東明慧日会下の人々が多く、東明和尚は示寂するに臨み、白雲派の後事を竺僊に託した。竺僊和尚は信義に篤い人であったのだろう。それを裏付けるものとして、彼の語録には、会下の禅者や遠近の禅人に説示し法語を与える事のいかに多いことか。竺僊和尚は非常に教育熱心な渡来僧であった。

竺僊梵仙が浄智寺に入院する日、誰も問禅する者がなかったので、妙葩はこの中国僧の新住に元音を操って問話し、一堂の者を驚歎せしめたという。『竺僊和尚住金宝山浄智禅寺語録』も彼が畜沢侍者と編んだものである。いわば恩義のある夢窓国師から託された妙葩に対し、竺僊和尚は「示葩侍者」の千五百字を超える親切な教示を与えているが、その冒頭で、〃祖師門下無二毫之事可レ言〃と言詮を断ち切る一大鉄鎚を下し、さらに語を強めて、

維の侍者俊敏にして学問人に過ぐ。豈に一世二世垢を刮り光を磨くとも、能く是に至らんや。更に照帯すべし。世智弁聡に流るる勿れ。益無くして道を妨ぐ。

と喝破している。字々に籠める竺僊和尚の荒い語気は叱責に近い[8]。それは妙葩の〃世智弁聡〃が目に余ったからであろう[9]。この教誡に妙葩はどう対応したか。竺僊和尚がまだ浄智寺を退かぬ以前に、廿五歳の妙葩は鎌倉を去って、南禅寺の国師のもとに旅立つ。それは建武新政が破れ、足利尊氏・直義が後醍醐天皇に叛いて西上した年である。この時竺僊和尚は「送葩侍者之京省師」二百六十一字を書き与える。冒頭に曰く。

古今道不得底句、道得不レ在二多言語一。不レ見霊山会上人、一笑迦文便分付。

別れに際しても、「不立文字」「以心伝心」の禅の本質を示しており、前述の筆者の推測はあながち的はずれでない事が分る。

建武三年は大動乱の年であった。南禅寺の外護者はこれ迄は主に大覚寺統皇室であったが、京都に開かれた足利政権は巧みな寺院統制策をとり、南禅寺をはじめとする寺領を回復するのに努める。上洛した妙葩は清拙正澄の下で典蔵となり、結制秉払を遂げた。[10]

三十歳前後の妙葩の消息は定かでない。師の夢窓国師は西方寺を禅寺に革ため、安国寺・利生塔建設を企画し、天龍寺造営を創めるなど、禅宗興隆に尽力していた。妙葩は多分この国師を補佐していたものと思われ、彼の政治的経営的手腕は、この頃に養われたのであろう。また、いわゆる五山版も天龍寺造営と時期を同じく刊行され、妙葩は康永元年三月に『霊源筆語』を臨川寺から出版している。この書は宋の霊源惟清が儒学者と交した宗義上の問答の書簡を収めたもので、妙葩の宗風にふさわしい出版であった。

貞和元年八月廿九日、天龍寺開堂法会がとり行なわれた。盛儀の模様は『園太暦』に克明に記されている。妙葩は紀綱として参列し、僧衆を統率してよく寺務の運営に当り、回向諷経の際には美声で先唱した。

この年は、妙葩自身の修行に一区切を画した年であった。国師に入室参禅を許されたのである。[11] 国師は「興化はなぜ克賓を打ったのか」と妙葩に鋭く問う。興化とは『臨済録』の校勘者で、彼が弟子の克賓維那に、「お前はまだ教化の資格を得ていないぞ」と打擲して寺から逐い出すと、克賓はそれから発奮して大悟した。夢窓国師はこの古則を示して、返答如何ではお前も放逐するぞと迫ったのである。維那の妙葩は「五逆雷を聞く」と応じた。かくして春屋妙葩は放逐されるどころか、このあと天龍寺開山の雲居庵々主となったのである。ところで『五灯会元』十一の興化存奬の所を読んでいると、この話柄の直前に雲居道膺と興化との問答が目に入り、何か因縁を感じるのである。

さて、雲居庵に住した三十五歳の妙葩は七十一歳の国師に親炙するが、まだ大悟するには到らず、「お前の応答は間違ってはいない。ただ知解に障げられているのだ」と、前に竺僊和尚から〝世智弁聡〟と言われたと同様の教えを受ける。かくして妙葩は勇猛心を奮って一向打坐し、『円覚経』の〝居一切時不起妄念〟を読んで、忽然と悟得した

のである。悟得の契機を知的に分析する事は笑止の沙汰だが、文学研究者の宿業からこの前後の『円覚経』の文句が読みたくなるのである。書き下しておく。

諸の戒定慧及び婬怒癡は倶に是れ梵行、衆生国土同一の法性にして、地獄天宮皆浄土なり。有性無性斉しく仏道を成じ、一切の煩悩も畢竟は解脱なり、法界海慧は諸相を照了すること猶お虚空の如し。此を如来随順の覚性と名づく。善男子よ、但だ諸菩薩及び末世の衆生は、一切時に居して妄心を起こさず、諸妄心に於て亦た息滅せず。妄想境に住して了知を加えず、無了知に於て真実を弁ぜず。

要は、煩悩即解脱の即非の論理を説く箇所である。妙葩は世智弁聡、知解を断とうと坐破している時も時、この円覚経の句を得て身心脱落し、早速国師に二偈を呈したのであった。

ところで、この『大方広円覚修多羅了義経』が偽経であるという説はともかくとして、圭峯宗密はこの経典を読んで天啓を受けた如く感動し、華厳哲学と荷沢禅とを綜合する教禅一致の体系を打ち立てたという。[12] なぜこんな話柄をここに持ち出したかというと、春屋妙葩の教禅一如の宗風を示さんが為である。たとえば『智覚普明国師語録』（以下『語録』と略記）巻二の「為登真院禅定尼月忌初辰請」に於て、春屋和尚は、

密教曰、成二就道業一乃至所禱追善感応必資二三力和合一。三力者以二成功徳力・如来加持力・及以法界力一。（後略）

と密教を説いているのであり、また、「光厳院尽七日御忌」の法語の中でも、

或曰二般若一曰二円覚一曰二妙法一、其名雖レ異体即無二一。（中略）円覚曰、無上法王有二大陀羅尼門一、名為二円覚一、流二出一切真如菩提一、教二授菩薩一、果見二三界大導師一。若能転二得如レ是経（円覚）一、即一念転二得百千万億経巻一。故六祖曰、心悟転法華、心迷法華転。圭峯禅師於二円覚一有二所証一、方始有二一言之下心地開通之語一。

と述べているが、まさに円覚経尊信の表白である。製作時期は不明だが、次のような偈頌も作っている。

読二円覚経一

蔵二啓光明一吾本源　無方清浄六塵根　鉱華離レ幻摩尼現　相病共空唯覚存　二十五輪標レ月指　上中下限入レ円門　堯風舜日流通普　誰向二庵前一問二世尊一

見逃しがあるかも知れぬが、傍点を付した字句はすべて『円覚経』に拠っており、文学的価値はともかくとして、円覚経の真髄を会得した者でなければ、作り得ぬ作品と言えよう。

得悟した妙葩に対し、夢窓国師は「春屋」の号頌と法衣（天龍寺開堂に際し国師着用）とを授け印可証明した。その号頌とは、

百花本是一枝花　百花　本　是れ一枝の花
遂見衆芳聯我家　遂に見る　衆芳の我が家に聯なるを
驀地開門出和気　驀地に門を開きて和気を出だせば
韶光従此遍河沙　韶光　此より河沙に遍ねし

（訳）多くの高僧の大悟も本は霊鷲山の拈花微笑の一本の花からで　遂に我が夢窓派からも芳しい得悟の僧が出た　以後はひたすら門戸を開いて和気（後進の指導）をなせば　春の光（春屋の禅風）は恒河の砂の如き無数の人に及ぶだろう

夢窓国師は手塩にかけた俗姪の悟得を大いに祝福するのであるが、右の第一句は奇しくも竺僊和尚が妙葩に贈った〝不見霊山会上人　一笑迦文便分付〟に通ずるものがある。なお『随得集』にも次のような文章がある。

貞和之秋、春屋座元示以下看二円覚経一十頌上。披而読レ之、其文彩璨然珠玉奪レ目、意致深宏溟海難レ測。可レ謂レ至矣（後略）。

後に嵯峨派内で対立する龍湫周沢も、かく言葉を尽くして称賛するのであった。

観応二年、足利尊氏・直義兄弟は骨肉の争いを繰りひろげ、勢威を誇った高師直兄弟も殺される。四月、夢窓国師は天龍寺に再住するが、春屋妙葩はその前に病を得たらしい。『空華集』七に、

辛卯春、吾兄春屋首座有二病中作一。同病諸公遞和賡和、或五首或十首乃至二三十首。愈出愈奇、一時之盛作也。周信亦効二其顰一。

とあるのはこの時の事で、義堂周信の「再酬春屋首座」を示しておこう。

賡酬未レ覚語言窮　畳々裁成錦段紅　忽見真珠生二掌内一　也応二美玉入二懐中一　鷹鸇奮撃百禽尽　騏驥嘶鳴凡馬空　無レ奈二詞鋒来二逼我一　傷レ人毒気甚二沙虫一

春屋首座を鷹鸇・騏驥になぞらえ、彼の吐く詩語を真珠・美玉・錦段紅と賛美する。結句の〝毒気〟は春屋の詩心を逆説的に称えているのだが、批判的な口吻が感じ取られぬでもない。龍湫周沢の、

和二春屋首座温泉詩一

師兄近自二湯山一返　示レ我佳篇意甚深　句々納レ新而吐レ故　言々挙レ古以明レ今　才声共備唐霊徹　道徳双全宋死心　密語就中蔵不レ得　満籯傾出四知金

も、春屋を霊徹や死心悟新に擬して称揚しているのだが、結句の〝籠一杯のような四知を傾け出している〟というのは、『漢書』韋賢伝の、〝子に黄金満籯を遺すは一経に如かじ〟に拠っており、龍湫和尚も秘かに春屋の才知を批判しているのである。

夢窓国師は天龍寺に再住したが、寺務や衆僧の統率指導は細大となく春屋妙葩が果たした。八月十六日の後醍醐天皇十三年忌も殆んど春屋首座が運営にあずかり、この仏事後に退院した夢窓国師は、九月三十日示寂する。かくして、嵯峨門派は守成期を迎え、それは一に春屋妙葩の双肩にかかったのである。

文和二年、春屋妙葩は『夢窓国師年譜』を撰し、東陵永璵作の夢窓塔銘を雲居庵後壁に刻み、『西山夜話』を闡揚する事業に力を注ぐ。そして延文二年、国師七年忌を営んだあと、初めて一寺（等持寺）に入院したのである。

延文三年正月には天龍寺、康安元年十月には臨川寺と、次々に嵯峨派にとり大切な伽藍が祝融に逢うが、春屋和尚

は造営幹事として再建に尽力し、災を転じて門派結束の好機となす。例えば、義堂周信は法兄春屋の命を受けて土佐へ化縁に赴き、翌四年八月には模堂周楷・陽谷周向ら九人と東下して、嵯峨派の教線を関東に伸ばすのであった。[10]

送二模堂蔵主東行一

於菟睡起出深林　於菟（虎）睡より起き　深林を出づれば
無意驚人人自驚　人を驚かす意無けれど　人自ら驚く
好去海東一万里　好し去け　海東一万里に
鯉魚一棒要親行　鯉魚（手紙）と一棒と　親しく行ずるを要す

東下する夢窓派十人への、春屋の熱い期待が二十八字に籠っている。

貞治二年十一月八日、春屋妙葩は嵯峨派の中心たる天龍寺に入院した。中厳円月製の江湖疏後半に次の如き文がある。

某人　名馳二四遠一徳重二諸方一、言行兼全福智両足。A 莅レ事也咄嗟而弁、談レ禅也照用同時。B 明鑑二来機一入レ門便知二好悪一、沢施二群品一随レ機乃分二多寡一。不レ忝二国師之嗣一、C 宜レ為二王者之師一（後略）

傍線Aは春屋和尚の政治的経営的才能を称え、Bは人事管理能力を指し（後に鹿苑僧録として人材を配置）、Cは夢窓国師の後継者として朝廷・幕府権力と結び付く事を述べている。

貞治六年三月、天龍寺は又もや炎上し、[11] 今回も春屋妙葩が復興に当る。

定番匠木屋条々　　妙葩

一、朝夕出入の事、奉行僧は堅く点検すべし。或は令に違跡し、或は期を待たず、随意の輩に於ては大工に報じ、寺家の出入を停止すべし。

一、同童部の事、木切と号して用木を取る条、其の費無きに非ず。縦い無用の木と雖も五寸以上の者は之を取るべ

からず（後略）

これはずっと後の相国寺造営の際の条々であるが、彼の建築事業に対する峻厳な態度は、天龍寺再建に於ても同様であったと思う。ところで、天境霊致の「謝三天龍春屋和尚来修寺-上堂」（『無規矩』乾）によると、春屋は前年六月からの南禅寺大改築にも関与しており、南禅・天龍の二大寺の造営を平行して進めたのである。

貞治六年六月十八日、三井寺大衆が南禅寺造営の為の新関を破却し、禅僧を殺害するという事件が勃発した。紛争は三井寺対南禅寺の枠を越えて、天台と禅との確執に拡大する。[08] 春屋和尚は最初は細川頼之と協力して事件処理に当ったが、頼之が山徒の嗷訴に屈してその要求を容れるに至り、〃西河潜子〃と自称して勝光庵に退いてしまった。比叡の旧仏教勢力と幕府権力に屈せぬ剛毅な精神、先の政変を見透す先見性をここに見る事が出来る。応安四年三月に、細川頼之は春屋和尚に和解を求め、南禅寺入院を要請するが、彼は拒否して丹後菖蒲谷[09]に隠退してしまう。

応安四年辛亥之冬、客中偶作

背負亀峯二十年　背に亀峯を負いて二十年
頭然努不忍安眠　頭然え[6]　努めて安眠するに忍びず
鐘声吼破清涼暁　鐘声吼破す　清涼の暁
一咲掀翻蟹穴天　一咲掀翻す　蟹穴の天

（訳）背中に天龍寺（嵯峨派）を負ってから二十年　精進努力して安眠するどころでなかった　（叡山の）鐘声（嗷訴）は清涼の暁に響き　わしは笑いとばして（丹後の）小天地に隠棲した。

二十年前といえば、亡き夢窓国師が天龍寺に再住した観応二年で、この年から嵯峨門派を背負って来たのだという自負心が、起句にある。〃頭然〃は文字通り火災に遭った事と解せられて面白い。結句の〃一咲〃〃掀翻〃の語にも、春屋の昂揚する精神、悪く言えば山門や管領への対抗心が表出されており、とても世間なみの隠棲人の詩ではない。

同じ時の作品をもう一首。

幾向大槐争変通　幾たびか大槐に向って変通を争い
楚人那得楚王弓　楚人那ぞ楚王の弓を得んや
到忘天下無天下　天下を忘れ　天下無きに到り
却把須弥納芥中　却って須弥を把りて芥中に納めん

○結句＝『維摩経』不思議品の〝唯応度者乃見須弥入芥子中。是名住不思議解脱法門〟に拠り、春屋の芥室の号もこれに由来する。

（訳）何度か夢の如きはかない世で変化に通じようと争ったが　楚人が楚王の弓を拾うようにはなれなかった（小さな俗事に拘ってはおれぬ）（丹後に退いて）天下を忘れ無を覚り　大小二見を超越した境地に住しよう

起句の〝大槐〟は槐位（三公）から管領細川頼之を連想させる。承句の『孔子家語』の故事は度量の小をいう成語で、大槐と対照の妙がある。転・結句の字間からは、かえって天下に執着する春屋の思いが伝わってくるのは、筆者の偏見のなせるわざか。

春屋妙葩は丹後で政治情勢が転換するのを待っていた。いや、必ず好転すると信じていた。

野老門前に変通を見る（壬子初正試筆）
世を挙げ相い争うも是れ変通（再住天龍示衆）

と屢々用いる〝変通〟の語は、『易』繫辞に〝一闔一闢これを変と謂い、往来窮まらざるこれを通と謂う〟とか、「変通は時に趣く者なり」とあり、春屋は時勢に応じて雲門寺に引籠ったのであり、又、時勢の変るのをじっと待っていたのである。彼のことだから拱手傍観して時を過さず、裏面工作も怠らなかっただろうが、この機会に閑居に徹する願望も強かったに違いない。

雲門寺偶作

丹陽山下雲門寺　丹陽山下の雲門寺
白髪倚窓江雪深　白髪窓に倚れば　江雪深し
水鳥浮沈雲断続　水鳥浮沈し　雲断続し
漁舟載得一閑心　漁舟載せ得たり　一閑心

承句の〝江雪深し〟は彼の逆境を示す。唐の柳宗元は、〝千山鳥飛絶　万径人蹤滅〟（江雪）と吟じて俗世と断絶した景色を写したが、春屋は浮沈する水鳥や断続する浮雲を見る。これは彼の心象風景でもある。柳宗元は、〝孤舟蓑笠翁　独釣寒江雪〟と孤独そのままの漁翁を詠じたが、春屋の作は写景に徹しきれていない。〝浮沈〟〝断続〟そして結句の〝得〟の圏点の字句は、説明に堕し、超俗に徹しきれぬ彼の心情を露呈し、主観的詩的分別知が働いている。春屋の見る雪は、〝爾も也吾を以て隠と為すか　雪後の千山も春に又動く〟（示珠侍者行）の如く、春動を秘める雪だったのである。読みようによっては、禅僧に非ざる柳宗元の「江雪」の方が、俗世を超越した絶唱と言い得る。『行業実録』に、

師唯通夕地炉焼レ葉、商二確古今一鞭二励後学一。靡レ有二一語以及二世相一。貼レ牓曰、曹渓門下不レ容二俗談一。

と記すのは、筆録者たる門弟の一面観に過ぎぬ。春屋自身、「借レ韻贈二常宗侍者一」で、

日月蹉跎すれど蟻磨は旋り
春来りなば　又　蕨の拳を生ずるを見ん

と詠っており、雪融けの春には、再び歴史の表舞台に出る意思を示している。

春屋妙葩が雲門寺に韜晦している時、応安四年に趙秩と朱本が、翌五年には仲猷祖闡と無逸克勤の両僧が来朝した。いずれも博多の地に留められ、両僧は同六年になって嵯峨向陽庵に入ることが出来たが、すぐ西下した。一方、趙秩

と朱本らは山口の大内弘世の許に滞留し、春屋の依頼で「夢窓国師塔銘」「雲門一曲序跋」を書く。前者には春屋妙葩の自派発展の願いがあり、後者には隠退時代の自作集に箔を添えたい意図が感じ取れる。

大悟の心境を吐露する偈頌も、宗教詩として深い味わいを有するが、退隠閑居の願望と、自己主張を否定し切れぬ心情との、矛盾を心底に蔵しての詠草は、それはそれで文学的興趣を漂わす。

寄大明天使趙別駕

世路悠々動易レ遷　心於二無事一日如レ年　春生秋実何言レ地　鴻去燕来斉物天　採二薬蓬宮一何所レ用　問二僊方丈一又徒然　負レ山国命為二含歯一　一葉身軽鯨海船

○第四句＝〝燕雀安知鴻鵠之志哉〟の大小をいう。○含歯＝語義は人のこと。趙秩が齧雪子と号したことに関連させる。○一葉＝『碧巌録』五十八の〝一葉舟中載大唐〟に拠る。

（訳）世俗の道のりは遠くてややもすれば変遷し易いが　心が事々無礙の境にあるなら一日でも一年のように長い　どこの土地でも草木は春に生長して秋に実り　秋に雁が北に帰り春に燕が飛来して大も小も万物は総て斉しい　長寿の薬を蓬萊宮（日本）に求めて何になろう　仙人を方丈山に訪ねても無駄なこと　（あなたの）国家の大使命は人々の為なのです　よくぞ身命を抛げうって大海を航しておいで下さった

首聯は春屋の心境であり、又願望でもある。頷聯で中国でも日本でも何処も同じなのだと、明使を慰めると共に、京でも丹後でも同じであると自分にも言いきかせる。頸聯も趙佚を徐福に擬して、「外に求める心」を否定しているのだが、時流に用いられぬ自己の徒然をも詠じているのかも知れない。

遣懐

悠々壬子秋　隻影倚二丹丘一　波湧珊瑚月　江分白鷺洲　松寒霜鶴老　島古玉鰲浮　得失知二多少一　凭レ欄見二一漚一

○珊瑚月＝『碧巌録』百の〝「如何是吹毛剣」陵云「珊瑚枝々撐二著月一」〟に拠る。後述するが春屋妙葩はこの語を頻用する。

○白鷺洲＝李白「登金陵鳳凰台」の〝二水中分白鷺洲〟に拠るが、雲門寺十境の一である。○玉鰲＝雲門寺十境の金鰲島をさす。○一溫＝『楞厳経』六の〝空生＝大覚中＝、如海一溫発〟による。

（訳）世俗から遠く離れた〈空間〉六十一才の秋〈時間〉　一人で丹後に身をひそめる　波の中に珊瑚の枝に光る月が見え　川は白鷺洲で分れている　寒さにも節をまげぬ松に老いた白鶴が舞い　太古より金鰲島が浮かんでいる　私は人生の浮沈のはかなさを知り　欄干にもたれて海中の溫を空しく眺める

第一句の悠々を前作の〝世路悠々〟と重ね合わすと、〝隻影〟は世俗つまり京の政界宗教界からの疎外感を表わす。しかし第五句で自己を歳寒松柏になぞらえ、管領権力に屈しない節操を自賛するが、〝老〟の一字がわびしく、頑固な自己を寂しく見つめている春屋の姿がある。

永和三年夏、五十五歳の愚中周及[20]が雲門寺を訪ねてきた。

老懐一首　寄＝及書記＝

釣＝寂丹江＝已七年　再逢＝高友＝問＝枯禅＝　清談不レ換＝楊州鶴＝　佳会却思＝桃洞仙＝　孤鴈秋深良夜月
残灯漏永落梧天　人生幾々解顔日　多是故交嘆＝逝川＝

前半で久しぶりに清談する悦びを詠う。愚中は枯禅を問うにふさわしい高友である。しかし、春屋の詩情は後半で一転する。寂・孤・残・落の四字の情が尾聯に集約され、まさに老いの繰り言となり、とても閑居に安住し諦念に徹していたとは言えない。丹後に退いた当時の、〝一咲掀翻〟〝須弥山を芥室中に入れよう〟の気概は何処へ行ったのだろうか。

この頃、京洛は所謂臨川寺復位事件で紛糾していた。愚中周及などは、〝忽聞＝臨川寺為＝五山＝、借レ韻賀＝祖塔光顕＝〟と単純に五山昇位を祝っているが、嵯峨門派の大半は十刹復位を望み、嵯峨派（龍湫周沢など一部を除く）対管領の争いが再燃したのである。しかるに『行業実録』にも『語録』にも、この事件の記述が無い。細川頼之を窮地に追い込んだこの事件に、春屋妙葩が無関係な筈があるまい。

次韻臨川龍湫法兄赴二千重山頭陀寺一

写レ句千重雲落レ筆　従他使三我入二吟郷一　道声揚レ遠鵬張レ翼　徳化薫時麝自香　不レ怪八祥生二宝地一　元来無三禍起二蕭牆一　頭陀寺古得二新主一　選仏也知開二試場一

龍湫周沢の徳化が遠く頭陀寺に及ぶのを称えているのだが、気になるのは〝もともと禍は内部から生ずるものでは無い〟という第六句である。龍湫周沢の『随得集』には「仏成道」と題し、

蛇心仏口老黄面　錯出二王宮一積レ恨長　強道今朝成二正覚一　不レ知又禍起二蕭墻一

と吟じており、臨川寺事件をめぐる二人の確執、つまり春屋和尚の事件介入を類推せしめる。『随得集』からもう一首。

人間万事不レ如レ休　唯有二寃讐一無二好仇一　身世相俱忘便是　何須三向レ外覓二丹丘一

〝この身も俗世も全て忘れ執着しないのがよく、外に丹丘（仙人の超俗世界）を求めなくてもよいのだ〟と詠う丹丘は、丹後の春屋妙葩を念頭に置いての語だと解しても無理ではあるまい。

この年三月、春屋妙葩は玉林昌旒を関東に派遣し、円覚寺再興の援助として錦宝百条を送った。義堂周信は、老師兄（＝春屋）今隠約に在れど尚鋭意力を戮せ、廃を宗門に起さんと欲す。徳量の大測るべからず。と感謝するが、傍点の語に門派経営者としての春屋の面目が躍如としている。

筆者は、春屋の閑居生活を、いささか生臭く述べすぎたかも知れぬ。しかし、以上のような葛藤があるが故に、日々是好日を愉しむ佳品が、一そう深く味読出来る。

謝二月山書記遠来一

袈裟空裏野盤僧　嬴得生来無一能　至レ老身心都放下　斉レ眉頭髪乱鬅鬙　同人扣レ寂三千里　高誼凌レ雲百万層　火不レ熱兮水不レ冷　却将二往事一照二履菱一

○月山書記＝夢窓疎石の嗣の月山周枢　○火不熱＝『五位顯訣元字脚』の〝嚼レ火不レ焼レ舌〟に拠るか。心頭滅却すれば火もまた涼しの心境か。又は冷暖自知の逆か。　○廢菱＝廢の字義は「けわしい」だが、菱形の鏡であろう。『大慧書』の「答林判院」（本稿十九頁）に〝荷葉団々団似鏡　菱角尖々尖似錐〟とある。

首聯は自卑であると共に、無能に徹する自負でもある。頷聯は栄辱も分別知も全て放下した自画像。頸聯で遠路はるばる来訪した月山の厚情を謝し、最後に往時を客観的に看る慧眼をうたう。働くものから見るものへ――。

用二前韻一、自遣

倦翼投レ林暮　地偏山気佳　紅霞鮮截レ錦　碧霧薄籠レ紗　沙際鷗相近　滄波夢不レ賒　忘レ吾何夕坐
花月影傾斜

○前韻＝「次韻示祐小生」をいう。祐小生は天助周祐。　○首聯＝陶潜「飲酒」の〝心遠地自偏（中略）山気日夕佳　飛鳥相与還〟に拠る。倦翼をことさら管領勢力との争いで疲れた春屋と解することはあるまい。　○結句＝李白「月下独酌」の〝花間一壺酒（中略）対レ影成二三人一〟に拠る。

陶淵明や李白の詩句を自家薬籠中のものとして、自在に駆使しているかに見えるが、「自ら遣る」の題名通り、小達磨や酒仙の世界に気を晴らしているのである。晋・唐詩の亜流と言えばそれ迄だが、尾聯は含蓄が深い。

何時になったら自我を忘れ、宇宙一ぱいに坐禅し得るだろう。かの李白は月花の下で酒を飲み、「我舞えば影零乱す」と詠ったが、儂の孤影は花梢より漏れる月光を浴びて、まっすぐ結伽趺坐出来ずに傾いている。

口語に訳せば訳すほど、春屋の心情から遠のくのだが、ざっと右に近い詩情を詠じているのだろう。

康暦元年閏四月十四日、細川頼之は政争に敗れ、

人生五十愧レ無レ功　花木春過夏已中　満室蒼蝿掃難レ尽　去尋二禅榻一臥二清風一

の廿八字を残して四国に退去した。春屋妙葩は早くもその翌日、八年ぶりに京の土を踏んだのである。

忽聞、法駕已帰京、端二坐雲居丈室一。不レ知二手之舞足之踏一。而不レ喜二和尚云来一、喜二乎法道之再盛一。（上春屋和尚）

というのは事件の首魁古剣妙快の書簡である。彼の言う〝法道の再盛〟とは嵯峨門派を中心としての視野であり、〝去りて禅榻を尋ね清風に臥さん〟という細川頼之の心境は眼中に無い。南禅寺には性海霊見が入院する予定であったが、急遽変更され、六月二日、春屋妙葩が入院した。

某（春屋）　恵性円明、願力堅固。九年居二陰霾之地一、息二諸縁一以修レ心。一朝奉二紫泥之書一、起二三昧一而応レ世。汾陽叟循二聡公之請一、妙喜翁赴二高宗之招一。先聖再来、後昆相慶。

という天境霊致の「春屋和尚住南禅山門疏」の傍点の語が、全くの修飾語である事は雲門寺時代の詩偈が示しているが、春屋和尚をば妙喜翁即ち大慧宗杲の再来であると認識しているのは留意すべきである。それは彼の宗風を示すものとして後述する。

普明国師住二南禅一時、以三此（薬師如来）声明断絶已及二五十年一、欲レ復二興之一。択二山中声明徒五十人一、令レ習レ之。皆不レ称二国師意一。（長禄元、二、三）

『臥雲日件録抜尤』のこの記事は、春屋妙葩が別伝妙胤や古先印元から学んだ声明を、法嗣の誠仲中欵に伝えたエピソードである。

『行業実録』は康暦二年に春屋和尚が天下僧録司に命ぜられたとしているが、『空華日用工夫略集』（以下『日工集』と略記。康暦元、十一、十二）に拠ると、明らかに十月十三日に日本最初の天下僧録司を拝領したのである。康暦元年十二月十三日付の東福寺僧衆御中宛の文書が傍証となる。これは、東福寺務田規が乱れ（九条、一条、二条の檀越の疎隔、寺領の混乱）、寺家より訴えていたのを、僧録として裁定した文書である。これより鹿苑僧録春屋妙葩は東福寺興隆に力を籍し、康暦二年八月には通天橋が完成した。

題東福通天橋

揮二却風斤一支二落霞一　虹霓千尺截二奔波一　通霄一路脚跟下　来往人従二鳥道一過

○風斤＝『荘子』の語　○截奔流＝『雲門録』の〝截断衆流〟に拠る。雲門文偃については後述。　○鳥道＝『洞山録』の〝我有二三路一接レ人。鳥道、玄路、展手。〟に拠る。

この韻に和して龍湫周沢・性海霊見ら十九人の長老が偈を作り、横額に記して橋頭に掲げる一大盛事であった。

これより先、即ち前年の冬、後円融天皇は春屋妙葩から受衣し給い、興聖寺（後の宝幢寺）も年末に着工、あくる正月廿六日には、智覚普明国師の号を授けられるなど、嵯峨門派は応安の嗷訴・臨川寺復位事件を克服して、康暦の政変を機に興隆の一途を辿った。

永徳二年二月晦日、七十二歳の普明国師は天龍寺に再住する。

再住二天龍一示レ衆

挙世相争是変通　世を挙げて相い争うも是れ変通
誰人解捕樹頭風　誰人か樹頭の風を捕うるを解さん
浮生楽在罷休地　浮生の楽しみは罷休の地に在れど
百歳易過弾指中　百歳も弾指の中に過ぎ易し
只為冤家添業繫　只だ冤家の為に業繫を添え
又匡清衆領天龍　又清衆を匡して天龍を領す
前途有債償憑此　前途債有り　償いは此に憑り
自覚蒼顔喜気紅　自ら覚ゆ　蒼顔喜気に紅なるを

○捕風＝とらえ所がない。　○樹頭風＝『五燈会元』大慧宗杲の章に〝苦口叮嚀却似二樹頭風過一〟とある。　○浮生＝李白「春夜宴桃李園序」の〝光陰者百代之過客而浮生若レ夢。為レ歓幾何〟に拠る。　○前途債＝春屋はこの時南禅寺の請を辞

したのでその借りがあった。

春屋妙葩の歴史哲学は十一年前と変らず、世相を〝変通〟と達観する。頷・頸聯で、休息を欲しているのに真摯な修行僧に引張り出された――と言いながら、最後にはにこにこ喜ぶ好々爺の姿を詠う。五月七日には等持寺で足利義満及び義堂と東西十刹を議定、六月十五日には岡松一品尼の下火、七月一日は将軍の命で諸山を議し、九月廿九日には義満から一寺（後の相国寺）建立の意志を告げられるなど、とても罷休の楽しみどころではなかった。

ところが、好事魔多し、永徳三年五月九日、足利義満は嵯峨門徒との絶縁を宣した。

早参府。府君怒形二於色一云、「吾欲下与二嵯峨門徒一絶上。自レ今以後、不三復為二法眷一。但為二開山国師門人一而已。」余問二其故一則、「以二春屋・龍湫不和一、諸弟鬩レ墻。今欲レ令二之和一、春屋不レ肯。不レ如与レ之絶交。」（日工集。同日条）

原因は龍湫周沢と和解せぬ春屋妙葩の態度にあった。この前後の『日工集』から推測すると、春屋妙葩や古剣妙快らは臨川寺の昇位が再燃するのを警戒して、龍湫周沢の三会院々主就任を承知しなかったらしい。龍湫和尚の就任を支持したのは太清宗渭で、太清と古剣ともかねてより不和であった。夢窓国師三十三忌を目前に控え、両者の和解に努める義堂の姿が『日工集』に綴られている。国師の大法要が終ると、春屋和尚は天龍寺から金剛院に退き、十二月十三日には、完工近い相国寺の第二代住持として入院した。

甲子歳旦　経散試筆

門従甲子啓真空　門は甲子より真空に啓き
道履清寧行大中　道は清寧を履みて大中を行ず
五日梵修功応手　五日の梵修　功は手に応じ
百花何処不春風　百花　何処か春風ならざらん

○甲子＝至徳元年。　○清寧＝『老子』の語。　○大中＝『易』の語。

干支はあたかも第一の甲子。龍湫和尚らと和解したかどうか不明だが、とにかく門戸を開いて大道無門を大らかに宣し、七十四歳の〝花紅柳緑〟の境地を示す。年が改まると相国寺の工事も進捗し、鎌倉の足利氏満や関東管領上杉憲方からの造営料も届き、将軍義満を喜ばせる。

カズヤ千代　名モ玉松の霰カナ　（二条良基）
歳晩喜レ回レ春　（義堂周信）
チル比ノ花ヤ山路ヲカクスラン　（足利義満）
鞋香草欲レ匂　（義堂）
雪ノアユミハ跡モ知ラレズ　（良基）
ケサ見ツル花ハ昔ニ散りナシテ　（義満）
春遊跡易レ陳　（春屋妙葩）
秋ノ田ノミヅホノ国モ治マリテ　（良基）
冕旒拝ニ紫宸一　（太清宗渭）

これは十一月晦日、義堂が住する上生院（南禅寺）での和漢聯句である。将軍の、〝今朝見た花はとっくに散ってしまった〟という和句に対して、春屋は、〝春遊などはかないもの、その宴の跡もすぐ古く過去のものとなってしまう〟と〝浮世若レ夢　為レ歓幾何〟の李白風の句を付ける。〝春遊〟には〝王者の巡遊〟の語義もあり、将軍の御成りを祝うのはまずまずの付句と言えよう。嵯峨門派に対する義満の怒りも、散り果てていたのだろうか。

至徳二年二月、春屋妙葩を開山とする宝幢寺の落慶供養が行なわれて十刹に列せられ、一寺一院様式で鹿王院も完成した。春屋は死期の近いのを悟ったのか、『鹿王院遺誡』を作り、塔主の任期、院中の僧の定員、日々の行事、寺の経済及び年忌費用など細々と言い残す。彼の門派の将来を案ずる心の表れである。かくして鹿王院に病を養い、嘉

慶二年、四月に逝去した義堂の後を追う如く、八月十三日、怡然として示寂した。遺偈は、

幻生七十有余年　幻生　七十有余年
了却先師未了縁　先師未了の縁を了却す
一国黄金収拾去　一国　黄金　収拾し去り
古帆高掛合同船　古帆高く掛く　合同船

○先師未了縁＝「再住天龍資聖禅寺語録」の二月晦の法語に、〝先師開山国師、挙二法燈和尚先師未了話一拈云〟と夢窓国師の語を述べ、そのあと〝山僧即不レ然。以二偈一下二注脚一去〟と春屋は自己の見解を偈で述べている。　○黄金＝『虚堂録』三の拋二却黄金一捧二碌甎一〟に拠る。　○合同船＝『景徳伝燈録』五南陽慧忠の章に〝無影樹下合同船〟とある。

（訳）夢幻のような七十八年を生きたが　先師夢窓国師と果たさなかった〈逆説的表現〉仏縁を今結び了った。日本国中の人が　本来の仏性を自己中に見出したからには　わしは合同船（凡聖を超越した境地。大乗精神）に古い帆を張って出航しょう。

春屋妙葩が嵯峨門派を伸張し、寺院経営に力を尽くしたのは、些々たるセクショナリズムではなかった。深山幽谷に法灯を挑げて、一箇半箇でも真の禅人を接化し、仏法を伝えて行くのも秀れた禅匠であるが、春屋和尚は仏祖以来、夢窓から自分へと伝わり来る臨済禅によって、日本国中を教化しようとする大乗精神で七十八年を生きたのである。その大目的、大慈悲の為にはぜひ時の政権の力を藉りねばならず、そこに誤解を生ずる余地があったのである。

夢窓国師が大慧宗杲を敬仰していた事は、玉村竹二氏が懇切に説いておられるが、[22] 春屋妙葩も師に劣らず大慧宗杲を尊崇した。妙葩が『円覚経』を読んでいて、〝居一切時不起妄念〟に到り悟得した事は既に述べたが、大慧禅師も『円覚経』を重視しているのである。一例をあげると、『大慧普覚禅師書』の「答林判院」で、

経云、「居二一切時一不レ起二妄念一。於二諸妄心一亦不二息滅一。住二妄想境一不レ加二了知一、於二無了知一不レ弁二真実一」老漢昔居二雲門庵一時、嘗頌レ之曰、「荷葉団々団似レ鏡　菱角尖々尖似レ錐　風吹二柳絮一毛毬走　雨打二梨花一蛺蝶飛」云々

と『円覚経』の花紅柳緑の禅境を頌[23]に表している。春屋は「看大慧広録普説」と題する七言の偈を作っているぐらいで、大慧禅師の語録には精通していたはずである。

看大慧広録普説

坐断千差口罵天　千差を坐断し　口に天を罵り
雷霆舌上放西川　雷霆舌上に西川を放つ
無端没溺平人了　端無くも平人を没溺し了る
覆水難収海蚌禅　覆水収め難し　海蚌の禅

○坐断＝『大慧書』下「答曽宗丞」に〝便是成レ仏作レ祖、坐断天下人舌頭処二也〟とある。○罵天＝大慧宗杲を杲罵天という。○海蚌禅＝『大慧正法眼蔵』六に〝我這裏是海蚌禅、開レ口便見二心肝五臓一〟とある。

結句の〝海蚌禅〟の語が示す如く、大慧の宗風は全ての手の内をさらけ出し、種々の手段を講じて学人を接得することであった。学人だけではなく平人までも、書簡などを用いて懇切に導くのである。春屋妙葩もその『語録』を開くと、「阿州南明山補陀禅寺光勝院宝殿、慶賛本尊円通大士勝軍地蔵」「為国母光儀門院七周御忌之辰」「為荻野尾州太守同叟居士宗珠七周忌請」「為細川讃州太守宝洲繁公居士一十三回忌辰」「恭為光厳院五七日御諱」などの法語が巻を埋めている。夢窓国師や中厳円月などの法語と較べると、遥かに長い。それは単に平人の死者への功徳回向だけでなく、生者に対して懇切に禅旨を説くものであった。

さて、中厳円月の秉払の法語の中に、

大慧禅師在二雲居首座寮一、因二冬至一秉払。昭覚元和尚問云（後略）

という語がある。これは、『五灯会元』の、圜悟克勤の下で大慧宗杲が昭覚道元と丁々発止の禅問答を交して、一代の勝会と喧伝された記述に拠っている。春屋妙葩が三十五歳で悟脱したのは、大慧禅師と同じく雲居庵に住していた

時で、その翌年の天龍寺での秉払も一時の勝会であった。春屋は大慧との深い因縁を一そう強く感じた事であろう。

貞治二年十一月八日、天龍寺初住の当晩小参法語に、次のような文章がある。筆者自身も嚙みしめたいので書き下しておく。

復挙す。馮侍郎（馮楫。『五燈会元』巻廿に以下の問答がある）大慧禅師に問いて云く、「和尚曽て這の虫豸に做らずと道う。今日甚に因りて住山するや。」大慧曰く、「尽大地是れ一箇の杲上座、爾何処に向って我を見るや」と。拈じて云く、侍郎は懸崖万仞の処に向って、力を著けて大慧に一拶す。若し翻身を解せずんば、性命洎び他の手裏に帰せん。今夜、或は人有りて恁麼の問を致さば、只だ他に対して道わん、〃野色更に山の隔断する無く　天光直ちに水と相い連なる〃と。

この馮楫と大慧禅師との問答は、夢窓国師南禅寺初住の索話にも取り上げられている。大官寺に初住する夢窓派の和尚は、大慧宗杲の精神を己がものにして入院したのであった。

「あなたは前に『こんな虫けら（住持）にはならぬ』と言ったのに、いま何故住山するのか。」という馮楫の質問に対し、大慧禅師は、「住山しようがしまいが、又、山であろうが川であろうが、この全大地が宗杲なのじゃ」と答えたが、わし（＝春屋）なら次のように答えよう。

野色更無二山隔断一　天光直与レ水相連

野色（野の景色）はどこまでも野色で、山が邪魔したりせず　太陽の光は水平線で水と続いている。

野色云々の春屋の十四字の真意は、筆者如き俗漢には到底解し得ぬが、字づらからは、「天龍寺の住持（＝山）になっても、わしの本性（＝野色）は変らないぞ」と解釈出来、五山の大寺への入院が、俗世のように地位名誉の為でない事を表明しているのであろう。

南禅寺山門事件によって丹後の菖浦谷に隠退した春屋妙葩は、京極氏から真言宗に属する鎮海亭を寄せられ、これ

を禅宗寺院に改めて雲門寺と名づけた。この寺名は『行業実録』に、〝蓋慕二妙喜遺風一也〟とあるように、大慧宗杲を敬慕して命名したのである。『五灯会元』巻十九の大慧宗杲の章に、

師（大慧）雲居山後の古雲門の旧趾に庵を創め以て居り、学者雲集す。之を久しくして閩に入りて茅を長楽洋嶼に結べば、従いて法を得る者十有三人なり。又、小渓雲門庵に徒る。後に張丞相魏公浚の、径山の命に応ず。

とあり、大慧禅師は雲門文偃を尊崇して雲門庵に住し、そこから中国五山の能仁興聖万寿禅寺に出住したのである。春屋和尚も、今は雲門寺に隠棲しているが、大慧禅師が雲門庵から天下に出たように、儂もいずれは――という想いが無かったとは言えまい。既述の〝爾也以レ吾為レ隠乎　雪後千山春又動〟（示珠侍者行）の句をここに想起するのである。

『語録』巻八に道隠昌樹作「夢中像記」という文章がある。それは春屋和尚の門弟昌樹が、永徳二年正月十七日に雲門寺で見た夢の記述で、中国に渡航して寂れた四祖大医禅師の道場を訪れた昌樹は、妙喜世界で大慧普説を談じようとしている中巌円月に出会う。近付くと中巌は中央に掛っている画像を指さし、「大慧禅師だ」と言ったが、像の上方に大智普明の四字があり、まさに吾が普明国師の画像であった。ちょうどその時、開静板が鳴り響いて目が覚めた――という夢を記したあと昌樹は、

昔、大慧禅師（中略）貶レ衡移レ梅凡十七年矣。乙亥冬蒙レ恩北還（中略）。寔六十九歳也。
老師（春屋）応安辛亥之冬、謝レ事寓二于丹之海嶼古雲門寺一、凡九年矣。康暦改元之孟夏、俄得二鈞翰一上洛（中略）。
師年亦六十九歳也。噫、昔祖今師、進退住院、年方同一而殆冥合者何也（後略）

昌樹はこの後も、七十歳、七十三歳の大慧と春屋の行履が符合しているのを長々と記述している。春屋和尚は昌樹たち門弟に、つねづね大慧宗杲と自分との深い因縁を語っていたのではあるまいか。

大慧禅師の法孫の笑隠大訢[24]は四六疏に秀れ、『蒲室集[25]』という詩文集を遺しているが、春屋妙葩が延文四年に刊行

したのも、大慧禅の宗風尊崇の表れと言えよう。

大慧宗杲への傾倒は、自ら雲門文偃への敬慕に繋がる。春屋和尚は上堂説法に、枚挙に遑のないほど『雲門録』を拈提する。一例をあげると、天龍寺初住の法語には、花薬欄、北斗裡蔵身、体露金風などの有名な古則を拈じているのである。雲門に関する偈頌を少しく読んでみる。

妙喜背触ニ竹篦一

雲門鼻横当路　雲門の鼻　当路に横たわり
毒気逼人機奪機　毒気人に逼りて　機は機を奪う
急抜蛇頭遅了也　急ぎ蛇頭を抜けども遅了なり
羅睺入命已多時　羅睺命に入ること已に多時

○背触竹篦＝大慧宗杲の故事であろうが不明。『宝鏡三昧』に〝背触俱非、如大火聚〟とある。○鼻＝辛辣な師家の接化の喩。

（訳）雲門の厳しい竹篦が蛇のように道の行手を遮り　その毒気は学人に逼って心の働きを奪ってしまう　慌てて蛇の頭を引き抜いた（竹篦を逃れた）が既に手遅れ　（私は）一言半句を求めて月日を費してしまった

多年文字禅を求めて来てしまった――という結句は、禅に特有の逆説的表現であろうか。長い間看話禅を提唱し続けた妙喜と、世智弁聡に流れてきた春屋妙葩自身の姿ではなかろうか。人が歴史上の人物を尊崇するというのは二通りある。自分の境遇や気質や思想と共通点を見出す人物と、逆に全く自分に欠けているものを所有する人物とである。春屋妙葩が傾倒する大慧宗杲は前者であり、雲門文偃への敬仰は後者であろう。『五家宗旨纂要』には、雲門の宗風は言語思量では測り知れぬ接化であると説明している。

雲門胡餅

機鋒満肚問禅人　機鋒満肚の問禅の人
越格越宗請指陳　越格越宗　指陳を請う
甘露元為天上味　甘露は元　天上の味なり
蝦蟇終是海龍珍　蝦蟇は終に是れ海龍の珍

○蝦蟇＝『碧巌録』七十二に〝蝦蟆窟裏出来、道二什麼一〟とある。

（訳）全身禅機に溢れる問禅者が　仏祖を超越した所は何ぞやと訊ねた　甘露はもともと天上界の味で　知解に堕す蝦蟇は最終的には海龍に食われて珍味となる。

これも、分別知によって仏法を訊ねることを、自戒をこめて詠っているのであろう。

僧問二雲門一、「如何是諸仏出身処」曰、「東山水上行」

抜却斗門千尺閘　斗門千尺の閘を抜却し
百川放使向西朝　百川放ちて西に向って朝がしむ
当初禹力帰何処　当初の禹力　何処にか帰する
只見漁人弄海潮　只だ漁人の海潮を弄するを見る

（訳）千尺の水門を抜いてしまい　多くの川を放流して西の海に注がせる　太古、洪水を治めた禹の力はどうなったのか　ただ目に入るのは漁師が海に浮んで波と戯れている姿のみ。

題の問答は、静の東山と動の水上行と、動静の二元的なものを超越した、或は動静のすべてを包みこんだ境地を示す『雲門録』の公案で、大慧宗杲も、「一口吸尽西江水とか東山水上行とかの公案をよく参究しなさい」（答張提刑）と説いている。この有名な公案をテーマにして、春屋妙葩は動の面からぐいぐい詠っているのである。分析的注解は蛇足なのだが、前半二句は、機根に応じた辛棘な接化によって、百川が海に注ぐ如く学人が「祖師西来意」を悟ることを

言う。結句の〝漁人弄海潮〟は尽天地と一体となった、あるがままの逍遥遊の境地を示すのだろうが、有名な銭塘の海潮音が耳朶に響くようで、さらには、観世音説法の語義をもつ海潮音の語が連想されて、味わい深い。もう一首、

僧問二雲門一、「樹凋葉落時如何」曰、「体露金風」

樹凋葉落甚時節　樹凋み葉落つるは甚の時節ぞ
体露金風作者知　体露金風　作者知る
匣裏吹毛元不動　匣裏の吹毛　元　動かず
珊瑚撐月一枝々　珊瑚　月を撐う一枝々に

起承句は『雲門録』や『碧厳録』廿七にある古則を連ねただけのことであり、転結句も『碧厳録』百則の巴陵顥鑑（雲門、文偃の法嗣）の問答を、韻律を調えて並べた句に過ぎぬ。筆者が蔬筍の気溢れるこの偈をここに記したのは、春屋和尚が〝珊瑚〟の語を頻用するからである。

擊砕珊瑚月　蹈翻鏡裡天　（周祐蔵主請）
紫竹白沙路　珊瑚樹々斜　（又和十首）
波湧珊瑚月　江分白鷺洲　（遣懐）
想見鮫人室　珊瑚把作薪　（書懐）
好攀仙桂一枝玉　更為珊瑚問落頭　（月洲）
交光布陰十洲外　不比珊瑚撐月枝　（玉林）
更有海神相見処　団々珠遶玉珊瑚　（送幹書記云々）
妙唱珠回玉転時　珊瑚圧倒百花枝　（次韻酬云々）
鉄鞭擊砕珊瑚月　惹著鳳凰窺徳輝　（雪竹）

遠問河源離海津　珊瑚戛月入冥々　（張騫乗槎）

巴陵和尚は『碧巌録抄』に〝顎鑑有二多口之称一〟と記され[24]、弁論の大家と言われる人である。春屋妙葩は巴陵顎鑑の禅旨に共鳴して、偈頌にこの語を多用したのだろうが、その根柢には彼の美意識があったのである。春屋は「丹陽十題[25]」の中で、「雲門推月」と題し、

寺接二海門一波湧レ金　珊瑚岸々玉琳々

と首聯でうたうのは、彼のこの美意識が造り出した舞鶴湾の景色なのである。所与の紙数も尽きようとしている。尻切れとんぼの観があるが、七言を一首読んで擱筆することにする。

瓶珊瑚樹

頻伽銜得転風流　頻伽銜み得たり　転風流
鉄打中心不受秋　鉄打せし中心　秋を受けず
裂破巴陵三寸舌　巴陵の三寸の舌を裂破し
一天星斗遶枝頭　一天の星斗　枝頭を遶る

○頻伽＝ここは頻伽鳥の形の水瓶。『首楞厳経』二に〝阿難譬如レ有レ人取二頻伽瓶一塞二其両孔一云々〟とある。○転風流＝俗事を離れ移り変る風流。転は第三句の巴陵三転語を導くか。○不受秋＝秋（の月）を受け入れない。秋月は勿論珊瑚枝々の月。○巴陵三寸舌＝「銀盌裏盛雪」「珊瑚枝々撐著月」「鶏寒上樹鴨寒下水」の巴陵三転語。○三寸舌＝『趙州語録』序に、〝三寸綿軟舌縦横自在〟とある。○一天星斗＝李中「江行夜泊」に〝一天星斗寒〟とある。

（訳）頻伽鳥（瓶）は移り変る風流（種々の花木）を口にふくむ事が出来るが　堅固な鉄の心は秋（の月）だけは受けつけない。三転語を自在に説く巴陵の舌を（嘴で）ひき裂いて　空一ぱいの星が珊瑚樹の上をめぐっている。

含蓄の多い作品なので、作者春屋が意識していたかどうか不明だが、煩瑣な語注と現代語訳を付してみた。肯定の起句、否定大否定の承・転句、そして肯定の結句という構成は、即非の論理（小稿四頁に述べた『円覚経』の論理）を示す

が、文学的評価はどうだろうか。筆者はやはり雲門寺時代の作品に文学的興趣を覚える。閑居枯淡の情と、輦寺帰住の期待抱負との矛盾的自己同一性を、自照自詠する丹後の調べに魅かれるのである。

注

(1)「夢窓正覚心宗普済国師塔銘」によると、夢窓疎石の徒弟は一万三千有余人に達したという。

(2)『普明国師と鹿王院』は東山梨郡東光寺村辺を出生地とする。

(3)『禅文化』八三号「伊勢と甲州」(柳田聖山)参照。なお『智覚普明国師語録』(以下、本文でも語録と略記)巻三「為先考了性、先妣円和三十三年忌請」によると、両親は同年に逝去し、巻六「火後重修移二親墓」では、東国から京師に墓を移した事を述べる。

(4)『蔭涼軒目録』(延徳三、四、十七)に、〃愚(亀泉集証)白、「当院開山普明国師者正覚国師上足也。三歳読二心経一、七歳読二法華一。文殊再来也。正覚者観音再誕也〃とあり、没後百年たって、伝説化されようとしている。なお文殊再来については注(9)の『玉塵抄』も参照。

(5)『首楞厳三昧経』にもある事に後で気付く。

(6)『夢窓国師語録』上の「満翁庵主請」及び『絶海和尚語録』上の「恵林第二世満翁和尚入祖室」参照。後者によると、満翁は夢窓国師と同年令で、二人は相い次で(或は同時に)一山一寧に参じ、また大陸禅になじめず、二人とも一山の会下を離れた。夢窓は高峰顕日の、満翁は夢窓の法を嗣ぐ。

(7)『竺僊和尚語録』下の「与南禅夢窓和尚書」に、竺僊の浄智寺入院は夢窓国師の推薦によるもので、同寺の寺産が豊かなのも、寺僧の行道の秀れているのも、すべて国師のお蔭であると感謝の語を連ねている。

(8)他方、竺僊は小師竇翔との「問答」(金剛無量寿寺語録)では、「僧はまず宜しく学道を本と為すべし。文章は之に次ぐ。(中略)但だ道を以て大事と為し、文を以て助くれば乃ち発揚すべし」と述べている。応機説法である。即ち妙葩の機をみて不立文字を強調するのである。

(9)『玉塵抄』巻四十二には、〃某塔頭ノ普明国師ハ文殊ノ□□(不明)ヲ一昼夜クラシムタゾ。人ガ八舌ノ国師ト云タゾ〃と記す。

(10)『大通禅師語録』六の年譜によると、この年、十三歳の愚中周及が美濃より上京、夢窓国師の命で春屋妙葩に随った。愚中周及が後出するのでここに注記しておく。

(11)『夢窓国師年譜』(春屋妙葩編)の貞和元年の項に〃老而益健、夏前為レ衆入室鞭二礪学徒一也。秋八月以二先皇七年忌一行二天龍開堂法会之儀一〃とある。

(12) 柳田聖山「中国禅宗史」（講座『禅』第三巻所収）六三頁。

(13) たとえば『円覚経』冒頭の〃入於神通大光明蔵〃そして〃爾時便得無方清浄〃〃六塵清浄故地大清浄〃など。あとは省略。

(14) 『玉塵抄』巻十五に〃某ガ塔頭ノ祖師普明（春屋妙葩）ハ左ノ掌ノマン中、肉ガタカウ小イ玉ノ如ニアリ。掌内ノ珠ト云タゾ。禅客ニトワレタゾ〃とあるように、義堂周信の七律の第三句は、事実に基く句である。

(15) 足利義満は義堂周信の『夢窓年譜』講義を聞いて嵯峨派の禅に帰依する心を深め（『空華日用工夫略集』永徳二、十、十三）、太岳周崇も三会院で講じるなど、重要な典籍であった。

(16) 『空華日用工夫略集』（延文四、八）に〃両師兄（春屋妙葩・龍湫周沢）呵責或慰諭曰「今海東乃法戦之場、文物之苑也。方二是時一也、張二吾軍一輔二吾宗一者、捨レ公（義堂周信）其誰。勿レ拒也」とある。

(17) 『太平記』巻四十に〃三月廿八日丑刻二、夥敷天変西ヨリ東ヲ差テ飛行クト見ヘシガ（中略）失火忽ニ燃出テ一時ノ灰燼ト成リニケリ〃ト記し、中殿御会や将軍参内が延引した事を述べる。

(18) 『師守記』（貞治六、六、十八）及び『太平記』巻四十「南禅寺与三井寺確執事」参照。

(19) 『蔭涼軒日録』（文明十八、十二、廿七）に、〃鹿王院領丹後国余戸里庄事云々〃の記述がある。それは文明十九、八、十三の普明国師百年忌に際し、守護の横領する余戸里庄を還付されたいという訴訟についてである。雲門寺はじめこの余部里庄（舞鶴市余部下）の舞鶴東湾の上の菖蒲谷にあった。

(20) この前年、愚中周及は、雲門寺からさほど遠くない丹波福知山の金山天寧寺に住し、『雲門一曲』跋を書いている。なお雲門寺での愚中和尚の作の頸聯は〃夢中栄辱有二何命一毫末功名未二必天一〃という対句で、栄辱や功名を払拭し切れぬ春屋の心情を見ぬいているかのようである。

(21) 『空華日用工夫略集』の〃臨川寺官陞為二五山列一、龍湫和尚入院在レ近〃（永和三、九、十四）と、〃乃審、曩芳旧歳十二月臨川入院〃（永和四、二、十二）とを読み合わすと、龍湫和尚は五山位の臨川寺に約三ヶ月住した事になる。

(22) 玉村竹二『夢窓国師』（サーラ叢書）九五頁以下。

(23) 実はこの頌は『五燈会元』巻五の夾山善会の作であり、それを大慧宗杲が引用した。

(24) 参考のため法系を示しておく。

大慧宗杲―（四代略）―虎丘紹隆―（六代略）―夢窓疎石―春屋妙葩
　　└東陽徳輝―中巌円月
　　└笑隠大訢

(25) 筆者架蔵『蒲室集』跋に〃保寿尼寺檀越菩薩戒尼大友惣持、施レ財命レ工、刊二行此版一。伏願、人々粛二清慧目一、開二悟霊心一、恩有報資怨親融接。延文己亥春雲居比丘妙葩題〃とあり、大友氏の浄財によって刊行している。なお、足利

学校遺跡所蔵『蒲室集』は、余白や行間に中巌円月がびっしり書入れをしており、その冒頭に〝等持春屋禅師刻二蒲室集一。版既成俾二予解了一〟とあり、春屋妙葩の依頼によって中巌円月は注解を施したのである。

(26) 松ヶ岡文庫所蔵、岩波書店刊『禅籍抄物集』のうち『碧巌録抄』九・十の八七〇頁。

(27) 「丹陽十題」とは、「雲門推月」をはじめ、天橋跨海・成相積雪・普甲晴嵐・神府画屏・鮫宮玉箱・千歳龍松・九世聖灯・金島雪浪・福島白沙の七律で、雲門寺付近の丹後の名勝を詠う。